

12. 種まきのたとえ

ペテロの手紙#12

<https://ichthys.com/Pet12.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

第一ペテロ 1:1-2 の改訂訳：

イエス・キリストの使徒であるペテロから、父なる神の予知により、聖霊の聖別を受け、イエス・キリストの血の注ぎかけのもとに従順な者となるために、選ばれた人々、すなわちポントス、ガラテヤ、カッパドキア、アジア、ビテニヤの各地に散らされ追放された人たちへ。あなたがたに恵みと平和が増し加わるように！

ペテロの書簡の冒頭において、ペテロは初期の信者たちの苦しみを認め、キリスト者として私たちは皆、この世においては追放者であり、世界のあらゆる地域に散らされている者であることを確認しています。しかし、私たちは確かに「異郷に住む旅人」であり、この世との敵対関係によって生じる不快さから完全に解放されることは決してありませんが、それでも私たちは神に選ばれた者であり、主イエス・キリストへの信仰に基づいて、神ご自身によって特別に選ばれた者であることを思い出さなければなりません。この「選ばれた者」という特別な地位は、すべてのクリスチャンに共通して与えられたものであり、無目的に与えられたものではありません。それは大きな責任を伴うものです——すなわち、神が私たちにこの地上で託された使命を果たすという責任です。クリスチャンとしての私たちそれぞれの「使命」(すなわち、「私たちが遣わされた目的」)は、いずれの場合にも、他の信者たちの霊的な健全さと成長に何らかの形で貢献することを含んでいます。

他の人を効果的に助けるためには、私たち自身が霊的に成長する必要があり、これまでの学びでは、クリスチャン生活の本質的な目的は**霊的に成長することであり、他の人も同じように成長するのを助けること**であるという点を強調してきました。

私たちがキリスト者となっても、この地上での生活が突然、問題のないものになるわけではありません。むしろ、苦しみはキリスト者の生涯における通常の一部であり、霊的成長の過程において**欠かせない要素**なのです。神を信頼して苦しみに対処することを学ぶことで、私たちの信仰は強められます。そして、信仰の成長こそが、実際には霊的成長そのものなのです。したがって、ペテロ

は読者たちが直面している困難や苦しみを認めたうえで、彼らに霊的成長という課題に力強く取り組むように強く励ましています。それが、彼が第2節後半で語る次の言葉、「恵みと平安が、あなたがたにますます豊かに与えられますように」という力強い勧めなのです。

この勧め(ギリシヤ語では願望法〈オプタティヴ〉で書かれており、ペテロの強い願いを表しています)は、単なる定型的なあいさつではありません。ペテロが「あなたがたに恵みと平安がますます増し加わるように」と語るとき、彼は私たちに霊的成長を励ましているのです。なぜなら、**霊的成長こそが、恵みと平安を増し加える手段**だからです。恵み(grace)と平安(peace)は、いわば同じコインの表裏のようなものです。どちらも、私たちが霊的に成長するにつれて受ける神からの祝福の増加に関係しています。「恵み」は、神が祝福を与える側面を強調しています。「平安」は、神からの祝福を受け取る側面を強調しています。したがって、ペテロの言葉を言い換えるなら、彼はこう語っているのです:「私は、神があなたがたにもっと豊かに与えられることを願い、そして、あなたがたが神からもっと豊かに受け取ることを願っています。」

しかし、神の祝福を物質的なものとして誤解してはいけません。愛に満ちた父である神は、私たちが「自分にとって良い」と思うものではなく、本当に私たちにとって最善のものを望まれます。神が願っておられるのは、世の中の状況に左右されない幸福と確信であり、それは神と御子イエス・キリストへの愛にしっかりと根ざしたものです。このことこそが、苦しみが私たちの人生における神のご計画の中で非常に重要な要素である理由のひとつです。苦しみを経験することで、私たちはより深く神に頼るようになり、また、限らない繁栄がしばしばもたらす物質への奴隷的な依存から解放されるのです。

ここでペテロが用いている「恵み(grace)」という語は、ギリシヤ語では $\chi \acute{\alpha} \rho \iota \varsigma$ (カリス / charis)、ヘブル語では יְחֵן (ヘーン / chen) にあたります。これらはいずれも「好意」あるいは「善意」を意味します。新約聖書において「恵み(grace)」という語は、単なる親切や慈悲というよりも、神が私たちに向けておられる好意的なご態度(善意)を表す、特別な神学的意味で用いられています。つまり、「恵み」とは、神がご自分の子どもたちに向けておられる積極的な愛の姿勢であり、その好意のゆえに私たちは、あらゆる祝福を受け取ることができるのです。私たちはこの「恵み($\chi \acute{\alpha} \rho \iota \varsigma$ / カリス)」の受益者ですが、それは決して私たち自身の行いや功績によるものではありません。私たちは信者として御子イエス・キリストのうちにありとされたため、神は私たちをキリストにおいてご覧になります。そして、御父がいつも「喜ばれるお方(well pleased)」である御子のゆえに、私たちもまた神の恵み(יְחֵן / ヘーン)の対象とされているのです。(マタイ3章17節, 17章5節)

キリストを信じる者(クリスチャン)である私たちは、神の御子イエス・キリストとの関係のゆえに、神の恵み(神の好意)を共有しています。キリストを信じる以前、神の完全な義(ディカイオシュネー / δ ι κ α ι ο σ ύ ν η / dikaio-synē)は、人類全体に対して罪への裁きを要求していました([ローマ 1 章 18-23 節](#))。しかし、救いを受けた後――すなわち、私たちの罪がイエス・キリストの血によって覆われたとき、私たちは御子の御業によって義と認められた者とされました([ローマ 5 章 1 節](#))。このときから、神の私たちに対する態度はもはや罪への裁きの態度ではなく、恵みと祝福に満ちたものとなったのです。「恵み(χ α ρ ι ς / カリス / charis)」とは、神が私たちを祝福したいと願っておられることを意味します([イザヤ 30 章 18 節](#)参照)。そこには「彼は高い所においてあなたをあわれむのを待っておられる(פן / ハーナン / chānan)」というヘブル語の表現が用いられています。つまり、神は正義を少しも損なうことなく、イエス・キリストがすでにすべての罪の代価を支払ってくださったがゆえに、完全に正しい形で私たちを祝福することができるのです。

神の恵みを受ける者として、私たちは神の平安を体験します。「平安」はギリシヤ語で「**エイレネー**(ε ι ρ η ν η / eirēnē)」と言い、そこから英語名 Irene(アイリーン) が派生しています。この語の基本的な意味は「争いや心配からの自由」、すなわち「平穏・安らぎ・調和の状態」を表します。しかし、新約聖書の著者たちは、このギリシヤ語の概念をヘブル語の同義語「**シャローム**(שלום / シャーローム / shālôm)」と切り離して考えることは決してありませんでした。「シャローム」は単に「トラブルがない」という意味にとどまらず、満ち足りた心の状態、幸福、休息、そして静けさ・安らぎをも含みます。今日でもイスラエルでは、「シャローム」は挨拶の言葉として日常的に使われています。その根本的な意味は「完全であること、欠けるところがないこと」です。

信者である私たちは、本当に何一つ欠けていません。私たちは神の子であり、神のすべての約束の相続人であり、永遠の住まいが約束されており、神と御子の御前で永遠のいのちを生きることが保証されています。さらに、私たちは救われたとき、聖霊を与えられました。聖霊は、やがて与えられる永遠のいのちの「証印」であり、同時に「保証」です。またこの地上では、「助け主」として私たちを導き、慰め、力づけてくださいます。

ペテロがこの「平安」(そしてそれをもたらす「恵み」)が増すようにと願うとき、彼は実際には、私たちがすでに持っているものをより深く理解し、それに大いに慰めを見いだし、さらに積極的に神の栄光のためにそれを生かすようにと勧めているのです。ペテロの願いは、私たちが**成長すること**です。彼の願いは、私たちの信仰(成長の中心的課題)が確固としたものとなり、さらに広がっていくことです。なぜなら、霊的成長とは本質

的に個人の信仰の成長だからです。もちろん、信仰にはその結果として愛や奉仕などの実が伴いますが、真のクリスチャンとしての善行はすべて信仰に基づくものです。私たちは主イエス・キリストを信じることによって救われ、また主の教えを信じ、それを実践することによって成長していくのです。

種を蒔く人のたとえ：霊的成長の概要

種を蒔く人のたとえは、共観福音書すべて([マタイ 13 章 1-9 節](#); [マルコ 4 章 1-9 節](#); [ルカ 8 章 4-8 節](#))に登場し、その説明もそれぞれの福音書に記されています([マタイ 13 章 18-23 節](#); [マルコ 4 章 13-20 節](#); [ルカ 8 章 11-15 節](#))。このたとえは主として「救い」を扱っていますが、「霊的成長の仕組み」を理解する上でも非常に重要です。なぜなら、キリストに対してさまざまな態度がありうるものの、「信仰」というただ一つの態度だけが救いに導くように、主の教えに対しても多くの態度が存在するものの、「信仰」という一つの態度だけが霊的成長に導くからです。たとえの中で、種を蒔く人が四種類の土地に種を蒔きます。それは、道ばたの硬い地面、石地、いばらの生えた地面、そして良い地です。道ばたの硬い地に落ちた種は、すぐに鳥に食べられてしまいます。石地に落ちた種はすぐ芽を出しますが、根が浅いために枯れてしまいます。いばらの地に落ちた種は、まわりの雑草にふさがれて育ちません。しかし、良い地に落ちた種は成長し、豊かな実を結びます。イエスはその意味を次のように説明されました。硬い地とは、サタンによって福音を拒む人のことです。石地とは、試練の時に福音を捨てる人のことです。いばらの地とは、世の思い煩いや誘惑に心を奪われ、福音から離れる人のことです。

このたとえ話は、福音に対する四つの基本的な反応を示しています。そのうち、救いの信仰と真の霊的成長に至るのはただ一つだけです。解釈における共通の要素は次のとおりです。「蒔かれる種」は神の御言葉、すなわちイエスがキリストであることを告げ知らせ、救いはただキリストへの信仰によってのみ得られると語る福音のメッセージです。それぞれの「植物」は、その人の持つ信仰を表しています。そして「土地」は、人々の心の状態を象徴しています。重要なのは、どのような「土地」になるかを決めるのは私たち自身だということです。自分の心が硬い地なのか、石地なのか、いばらに覆われた地なのか、それとも良い地なのか——それを決める責任は、私たち一人ひとりにあります。

＜道端の＞固い地（信仰の死産）：「固い地」の人は、福音のメッセージを聞いても、キリストを信じることを選びません。種を奪って食べてしまう「鳥たち」は、イエスによる説明では、御言葉をその人の心から奪い取るサタンを指しています。道ばたの地面

が踏み固められていて種が入り込めないように、多くの人々の心もまた、キリストへの信仰による救いのメッセージに対して硬く閉ざされています。彼らの心は福音の真理に対して無感覚で、受け入れることができないのです。ルカのたとえ話([ルカ 8 章 5 節](#))では、「その種が人に踏みつけられた」と述べており、問題の本質をより明確にしています。

同じように、福音をすぐに心の中に迎え入れない人々は、福音の真理が周りの人々から軽んじられたりしているうちに、キリストを拒絶するようになります。イエスはこの過程を、「サタンが御言葉を奪い取る」と説明しています。サタンは、「人々が信じて救われることのないように」([ルカ 8 章 12 節](#))それを行うのです。マタイ([マタイ 13 章 19 節](#))では、すべての人が「御言葉を聞いた」が、それを「悟らなかった」とされています。神の真理を「悟る」——すなわち理解することは、信仰によってのみ可能です。「固い地」の心を持つ人々は、信じようとしないうちに、神の恵み深い救いを理解することがなく([ヘブル 2 章 3 節](#))、その救いは彼らにとって単なる「愚かさ」にしか見えないのです([第一コリント 1 章 18 節](#))。サタンはどのようにしてこれを成し遂げるのでしょうか。確かに彼は人々に影響を与えますが、最終的にイエス・キリストを受け入れるか拒むかの責任は、それぞれの人自身にあります。

このたとえ話の三つの記述では、それぞれサタンの名前が異なっており、不信仰な人を欺き、福音を無視するように仕向けるサタンの手口を知る手がかりとなります。マタイはサタンを「悪者」と呼び、真理を嘘で取り替えるという悪の手口の典型を示しています。マルコでは「サタン(ἑβρ / サターン / Satan)」と呼ばれ、これはヘブル語で「敵対者」を意味し、サタンは真理があるところならどこでもそれに敵対します。ルカでは「悪魔(δ ι α β ο λ ο ς / ディアボロス / diabolos)」と呼ばれ、これはギリシヤ語で「中傷者」を意味し、悪魔は福音の真理をあらゆる機会に中傷します。未信者がキリストに関する尊いメッセージを心に留め、思い巡らしているとき、敵である悪魔は、その人が福音を拒むように全力を尽くします。もちろん、彼が直接現れて働くのではなく、その人がこれまでに受け入れてきた偽り、恐れ、欺きといったものを用いるのです。この世は(しばらくの間)悪魔の支配下にあります([ヨハネ 14 章 30 節](#))。悪魔は、自らの目的に有利となる宣伝や虚偽でこの世を満たしています。人がキリスト者になろうと考え始めたとき、「悪者」である悪魔は、信仰による救いという真理を、「行いによる救い」という偽りで混乱させようとし、「敵対者」としての彼は、信仰を持つとするとする者を恐れや脅しによって引き戻そうとし(クリスチャンと認められることによる不利益を思い出させるなど)、「中傷者」としての彼は、福音を伝える者の動機を疑わせ、メッセージそのものへの信頼を損なおうとします。マルコの記述によると、サタンは「すぐに」行動し、真理の種が根を張って真の信仰を生み出す前に、それを奪い取ってしまいます。種は良いものですが、信仰は固い心の中で死産となったのです。

岩地(信仰が枯れる者)：——「岩地の人」は福音のメッセージを聞き、実際にキリストを信じます。しかしその「信仰」は一時的なものでしかありません。その結果、罪からの解放とキリストへの信仰による永遠の命というメッセージを「喜びをもって」受け入れたにもかかわらず、この一時的な信仰は、燃えるような太陽によってすぐに焼かれ、枯れてしまいます。イエスはこのたとえの中で、太陽を信者に必ず降りかかる迫害や苦難にたとえています。「岩地の人」は弟子として生きる代価を「計算していない」(ルカ 14 章 28 節～)ため、その信仰が本格的な試練に直面すると、命を失ってしまうのです。

「道ばたの地」の人の場合、信仰は根を張ることすらできませんでした。一方で「岩地の人」は根を持ってはいるものの、その「根」(新しい信仰への献身の深さ)は十分に深くありません。なぜなら「土の深みがない」からです。信仰は心に根づこうとしますが、すぐに到達するところに貫通できない岩の層があるのです。神に対して「ここまで、これ以上はだめです」と言うことはできません。イエス・キリストに対して「部分的な献身」などというものはあり得ません。信者は、救いの後もこの悪魔の世界にとどめられています。それは、彼らの信仰が本物であることを試練を通して示すためです。半端な献身、神を距離を置いて信じるような信仰では、真昼の太陽の熱に耐えることはできません。

イエスは(マタイおよびマルコの記述で)このような人々が「つまずく」(KJV)と述べています。この動詞はギリシヤ語 σ κ ά ν δ α λ ο ν (スカンダロン / skandalon) に由来しており、英語の「スキャンダル(scandal)」の語源です。七十人訳聖書では、この語は二つのヘブル語を訳す際に用いられており、一つは「つまずきの石」を意味し、もう一つは「罣」を意味します。どちらの意味も、ここでは信仰が中途半端な改宗者を表すのにふさわしい言葉です。彼らは迫害、苦難、試練につまずき、その信仰の歩みが妨げられ、やがて悪魔の誘惑に引っかかって元の生活に戻ってしまうのです。ルカの記述ではさらに明確に、「しばらくの間は信じるが、試練の時には信仰から離れ去る」と述べられています。ここで使われている「離れ去る」というギリシヤ語の動詞は、「背教(apostasy)」という言葉の語源であり、その意味は明白です。彼らは確かに一時的には信じたのですが、試練の圧力の中でその信仰を放棄するほうが都合がよいと判断したのです。種は良いものでした。しかし、信仰は岩のように硬い心の中に永続的に根を張ることができなかったのです。

いばらの地(信仰が成長しない者)：——「いばらの地」の人はキリストを信じはするものの、その心にはいばらもまた生えています。この「いばら」とは、信仰という「苗」とその忠誠を争い、やがて勝利して信仰を窒息させてしまうこの世の誘惑や心配事のことで

す。このような人は「御言葉を聞く」ものの、心に蒔かれた神の言葉は、キリストよりも重要だと彼が思っているさまざまな事柄によって締め出され、抑え込まれてしまいます。どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。

信仰を神から引き離す誘惑の主な要因を二つ挙げるとすれば、(1) 恐れと(2) 欲望です。悪魔の支配するこの世には、すべての人に、特にイエス・キリストを信じる者たちにとって多くの問題が満ちています。信者は皆、悪魔の敵意の標的となるからです。私たちが生きている限り、日々の生活の中で心配や欲望を感じるのは当然のことです。しかし、この二つの圧力の源を、正しい—すなわち天からの—視点から見るのが欠かせません。仕事や家族、健康、命などを案じるのは自然なことですが、神の視点からすれば、実際には心配する理由などないのです。

確かに、これは私たち人間には受け入れにくい考えです。苦しみや痛みが激しいときには特にそうです。しかしイエスが「何を食べ、何を飲み、何を着ようかと心配するな。あなたがたの天の父は、これらが必要なことを知っておられる」と語られたとき([マタイ 6 章 32 節](#))、それは神の立場からの見方を示された言葉でした。神は私たちのすべての問題をご存じであり、今この瞬間も、あらゆる困難が最終的に私たちの益となるように働かれています([ローマ 8 章 28 節](#))。心配や恐れは生涯を通じて私たちを襲うでしょう。しかし、それらに支配されてはなりません。神は、私たちが恐れるどんなものよりも力強く、また常に私たちを助けてくださる方だからです。さらに言えば、この世での問題が永遠に続くことはありません。マタイとマルコの福音書は、そのような心配事を「この世の心づかい」と呼んでいます。キリスト者として、私たちは希望を将来に置くべきです。そこでは、もはや恐れも心配も存在しないのです。([イザヤ 25 章 8 節](#); [黙示録 21 章 4 節](#))。

「いばらの心」を持つ人は、神を十分に信頼していません。問題が降りかかるとき、神が自分を導いてくださると信じられず、信仰は萎えてしまいます。

また「いばらの心」を持つ者は、欲望に直面しても同様の問題を抱えます。心配や恐れと並んで、欲望もまた絶えず私たちを悩ませるものです。アダムとエバの追放以来、すべての人間は「肉のうちに宿る罪」([ローマ 7 章 17 節](#))とそれが生み出す破壊的な欲望と格闘しなければならなくなりました。三つの福音書すべてで挙げられている代表的な欲望は、富への欲望です。問題なのはお金そのものではありません(生活に必要なものです)が、「金銭を愛すること」([第一テモテ 6 章 10 節](#))なのです。「いばらの心」を持つ者は、富への欲望を神への献身の代わりにしてしまいます。イエスはこのたとえの中で、富が「欺きに満ちたものである」と言われました。富は私たちにだまし、神への信頼

を捨てさせ、新たな主人—金銭—に仕えるよう仕向けるのです([マタイ 6 章 24 節](#))。

富がすべての問題を解決してくれるというのは幻想です。宇宙の創造主であり支配者である神への信頼を、この世の一時的で欺くような富に置き換えるのは、まことに愚かな取引です。イエスは、地上に富を積むことのむなしさを警告されました——「そこでは、虫が食い、盗人が侵入して盗む」([マタイ 6 章 19 節](#)～)。むしろ「天に宝を積みなさい」と言われ、「あなたの宝のあるところに、あなたの心もある」と教えられました。イエスはまた、「たとえ全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったら何の得があらうか」([マタイ 16 章 26 節](#))と問われました。「いばらの地の人」はこれらの警告を無視し、恐れと欲望に心を支配され、信仰の成長を止めてしまいます。その結果、「実を結ばない者」となるのです。これは、神が私たちのクリスチャン生活において望まれていること——実を結ぶこと([ヨハネ 15 章 16 節](#))——の真逆です。

私たちはこれまで繰り返し強調してきたように、この地上に生かされている目的は、**霊的に成長し、他の人の成長を助ける**ことにあります。これこそが、神が私たちに実らせようとしておられる「実」なのです。この「実」とは、単純に言えば、自分自身の信仰の成長であり、また私たちが助ける他の人々の信仰の成長です。私たちは「信仰がある」と口で言うのは簡単ですが、ヤコブが指摘するように、「行いのない信仰は死んでいる」のです([ヤコブ 2 章 17 節](#))。多くの人はこのヤコブの手紙 2 章の「行い」という言葉を誤解します。ヤコブが言っているのは、特定の「善行」(たとえば金銭の寄付や宣教師になること)ではありません。ヤコブは、特に神に従うことが非常に難しいとき、すなわち強く、目に見える信仰が必要なときの従順を念頭に置いています。彼が言わんとしているのは、私たちの人生の中で、信仰によって大きな決断をしなければならない瞬間のことです。そしてその一步を踏み出した後で、私たちは振り返って確信をもってこう言えるのです——「もし神を信頼していなかったら、私はこれを成し遂げることなど決してできなかっただろう」と。

ヤコブは、まさにそのような実例を選んで、自分の言いたかったことを説明しています——アブラハムが、自分の独り子イサクを犠牲としてささげるようにとの神の命令に従ったことです。私たちは今、すべての結果を知っています。神はアブラハムが息子を殺す前に止め、代わりに一匹の雄羊を備えられました。これは、キリストが私たちの身代わりとして十字架上で罪のさばきを受けられたことを明確に象徴する出来事です。しかし、アブラハムには結果がわかってはいませんでした。彼は、これまでの人生の希望を打ち砕くような、恐ろしい命令を受けたということだけは知っていました。それでも、彼は自分が知り、愛している神のご性格を信じたのです。

私たちの信仰を成長させるためにも、アブラハムのようにしなければなりません。信

仰によって、困難で時には不可能と思える状況に直面しなければならないのです。神の性格に関する知識と、神の善意と私たちへの配慮を信じる信仰だけを武器として、恐れと欲望を克服しなければなりません。そうした試練を経て、私たちもアブラハムと同じように、自分の信仰が本物であることを確信できるようになるのです。一方、「いばらの地の人」には、そのような経験がありません。彼は試練や苦難のときに神により頼んだことがないため、「行い」(すなわち信仰の結果)を示すことができません。この世の思い煩いや欲望に心が奪われ、試練や誘惑のときにも神ではなく他のものに頼ってしまうのです。イエスの言葉どおり、彼は「喜びをもって御言葉を受ける」ものの、ルカの福音書が述べるように、その「実を成熟させる」ことはないのです。

いばらの地のような心を持つ人を見て、本当にクリスチャンなのか、と私たちは問いたくなるかもしれません。真の信仰こそが信者のしるしですが、信仰が枯れて不信仰に取って代わられることがある([ローマ 11 章 20-21 節](#))と聖書は教えています。「いばらの地」の人々の中には、かろうじて本物の信者に含まれる者もいるかもしれませんが(もしそうであっても霊的には未熟で限界的な存在です)、そのような状態の危険性を深く考えるべきです。なぜなら、この世の終わりに来る恐るべき迫害——すなわち「艱難期」——においては、そのような中途半端な信仰を持つ者たちが多く信仰を捨ててしまうと預言されているからです([マタイ 24 章 10-12 節](#); [第二テサロニケ 2 章 3 節](#); [第二ペテロ 2 章 1-22 節](#))。生きている信仰だけが、この世の苦難や個人的な苦難を乗り越えさせることができるのです。最終的に私たちは選ばなければなりません——神を信頼するのか、それとも恐れと欲望の声に耳を傾けるのかを。恐れと制御されない欲望といういばらのとげが生い茂るところでは、神への真の信頼は育ちません。種は良いものでした。しかし、喜びとともに受け入れられた信仰は、いばらのような心の中で窒息してしまったのです。

良い地(信仰の成長)：「良い地」は、すべてのクリスチャンが目指すべき理想的な状態です。「良い地」の人とは、イエス・キリストを信じ、その後も信者として成長を続ける人のことです。彼の心には、神の教えを受け入れようとしない固い地面も、御言葉の根が張るのを妨げる岩の層も、芽生えた信仰の命を締めつけてしまう恐れや欲望といういばらもありません。ルカ([ルカ 8 章 15 節](#))には、イエスはこの「良い地」の人の心を「正しい良い心」と呼んでいます。

ここで使われている二つのギリシヤ語はいずれも「良い」と訳すことができますが、その意味の違いには重要な区別があります。最初の語「正しい」 $\kappa α λ ός$ (カロス / kalos) は、この場合「用途に適している」という意味です(たとえば「船を受け入れるのにふさわしい良い港」という使い方)。したがって、「良い地の人」の心は、神の御言葉

であるイエスについての種を受け入れることができる、すなわち「ふさわしい(適した)」心であるということです。二つ目の語「正しい」ἀγαθός(アガソス / agathos) は、「正しい結果を生み出すのにふさわしい」という意味です(たとえば「よく戦う良い兵士」という表現)。つまり、「良い地の人」の心は、神の御言葉の種から芽生えた「信仰の植物」が成長し、実を結ぶための肥沃な環境を備えているということです。実りの量には違いがあるかもしれませんが([マルコ 4 章 8 節](#)参照)、実を結ぶのは「良い地」だけであり、真に良い地はすべて確かに実を生み出すのです。

私たちはイエス・キリストについての福音を聞き、それを喜びをもって受け入れました。そのとき、信仰は私たちの心の中で芽生え、成長し始めたのです。ですから、この「信仰という植物」を大切に育て、神がそれを刈り込むときにも([ヨハネ 15 章 2 節](#))、落胆しないようにしましょう。また、自分の信仰を守り続け、まことのぶどうの木であるイエス・キリストにとどまりましょう。そうすれば、私たちは神が望まれる実を、定められた時に結ぶことができるのです([ヨハネ 15 章 5 節](#))。

「信仰は聞くことから生まれる」([ローマ 10 章 17 節](#))とありますが、聞いたすべての人が信じたわけではありません(堅い地はそうではありませんでした)。信じたすべての人がその信仰を保ったわけでもありません(岩地はそうではありませんでした)。そして、信仰をある程度保っていたすべての人が主のために実を結んだわけでもありません(いばらの地はそうではありませんでした)。したがって問題は、「御言葉を聞いたかどうか」ではなく、「御言葉を聞いた後にそれをどう扱うか」にあります。この問題は、私たちが霊的に成長し続けるための鍵でもあります。なぜなら、このたとえ話に見られる「福音のメッセージを受け入れるか拒むか」というパターンは、私たちクリスチャンにとっても、神の御言葉を聞くたびに繰り返されているからです。ただ聞くだけでは十分ではありません。もし私たちが御言葉の教えを最初から拒むなら(堅い地のパターン)、しばらくしてそれを捨ててしまうなら(岩地のパターン)、あるいは世の心配ごとや欲望のために御言葉を二の次にしてしまうなら(いばらの地のパターン)、私たちは霊的成長を危うくし、自分の信仰そのものを危険にさらすことになります。

三つの福音書すべてが、このたとえを通して「信じること」、すなわち神のことばに信仰を置くことを強調しています。いずれの記述においても、「良い心」を持つ人は神のことばを聞くだけではなく、さらにそれを実行に移す人です。マルコの記述では、その人は聞いて「受け入れる(παράδεχομαι / パラデホマイ / paradechomai)」とあります(<[マルコ 4 章 20 節](#)>)。すなわち、たとえ聖書の真理が自分にとって受け入れにくいものであっても、それを真実として受け入れるのです。マタイでは、その人は聞いて「悟る(συνιέναι / スニエーミ / suniēmi)」とされています(<[マタイ 13 章](#)

[23 節](#)>。これは目で見るとはなく、信仰によって神のことばの真理を理解するという意味です([第二コリント5章7節](#)参照)。ルカの記述では、その人は聞いて「保つ(κ α τ ε χ ω / カテーホー / katechō)」とあります<[ルカ8章15節](#)>。すなわち、困難や試練の中でも神のことばをしっかりと心に留め、離さないのです。このように神のことばを受け入れ(reception)、信仰によって悟り(perception through faith)、困難の中でも保ち続ける(retention)ことによって、良い心は「良い」のです。

良い心を持つ人は、霊的に成長し続けようとする意志を持ち、そして他の人の成長を助ける働きにも参与するのです。

恵みと平安： ペテロが2節で私たちに願っているのは、「恵みと平安があなたがたにますます豊かに与えられるように」ということです。つまり、私たちが霊的成長の課題に積極的に取り組み、神の豊かな恵みの資源を最大限に活用し、その結果として得られる驚くべき霊的平安を喜び楽しむように、という励ましなのです。しかし、もし私たちが神のことばに対して心をかたくなにし(かたくなな地)、それが私たちの心の奥深くまで根を下ろすことを許さず(岩地)、あるいは日々の生活の中の問題や悩みのただ中でそのことばをかき消してしまうならば(いばらの地)、この恵みと平安を味わうことはできません。私たちは、イエスを信じる信仰によって救われたように、その教えを求め、受け入れ、理解し、信仰によって心にとどめ続けることによってのみ、霊的に成長していくのです。

参考資料：

[『種まきのたとえ』とクリスチャンの報い](#)

[『種まきのたとえ』に関する質問](#)

[「絶対的永遠の救い」という誤った教理
背教と死に至る罪](#)